

平成 29 年度 自己評価表

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>○基礎基本の確立と意欲の涵養 ○社会人としての基礎力向上に向けた授業力の向上 ○進路保障と定着支援の充実</p>	<p>今年度の 重点目標</p>	<p>1 働く意欲や態度を高める職業教育の充実 2 人とのよい関係性や社会性を育む指導の充実 3 教職員の専門性や授業力の向上 4 教職員の対応力の向上 5 PTA活動の活性化</p>
---------------------------	---	----------------------	--

評価項目	評価の具体項目	年 度 当 初			評 価 結 果 (10月)		
		現 状	目 標 (年度末の目指す姿)	目 標 達 成 の た め の 方 策	経 過 ・ 達 成 状 況	評 価	改 善 方 策
1 働く意欲や態度を高める職業教育の充実	新しい年次的進行による各コースの決定とその実施 (○学科部)	○選択方法を学科の枠にとらわれない自由度の高いものにしていく。コースによっては生徒数がかかり少ないコースもあり、3年次の選択時に、コース学習に支障のない人数が確保できるかどうか不安である。 ○選択時期が全コース体験途中での実施のために、選択のために情報が揃わないままの希望調査となっている。	○意欲を持って学べるコースを生徒が選択できる。 ○選択時に適正な人数となっている。 ○選択の参考となるよう、コースの特徴が分かるような行事を選択時期までに実施する。	○1年次の全コース体験を年内にできるローテーションを考える。 ○専門成果発表会を12月中に実施する。 ○2・3年次のコース選択について、従前の希望調査表の様式を見直す。	○12月中に5コースの体験を実施できるように年間計画を見直し修正した。 ○12月16日(土)の成果発表会実施に向け準備を進めている。 ○コース選択希望調査表の希望コースを記入する欄を工夫をした。	B	○生徒や保護者に対するコース選択の説明会で、選択のポイントをわかりやすく伝える。
	働く心構えの指導 (外部講師の活用、進路担当者による指導) (○学年部、進路部、学科部)	○簡単に就職先が決まり働き続けられると思っている生徒もいるのが現実である。	○生徒が働き続ける上で自分の課題を知り、改善しようと取り組むことができる。	○外部講師による講演会を実施。 ○定着支援員や進路担当からの話を聞く機会を持つ。 ○ビジネスマナーの実施 ○現場実習の反省を基に自分の課題を明確にし改善に向けて取り組むための授業を行う。	○心の道場、講演、ビジネスマナー教室を実施した。 ○生徒アンケートの中で75%の生徒が「現場実習の目標を達成できた。」と回答している。	B	○焦点を絞って進路担当からの話を聞く会を持つ。 ○現場実習等での課題を意識した授業を設定し、目標達成を図っていく。 ○1～3年生で段階的に目指す姿を共通理解していく。
	専門教科の授業における共通目標の徹底 (○学科部、研究部)	○従前からの課題であるが、各コースでこの指導が徹底されていない現実があった。	○当該学年の共通目標について生徒・職員が認識し、年度末までに生徒の姿が目標に到達している。	○各コースの学習で「共通目標」を授業で使用する実習日誌に反映させる。 ○指導者は実習の振り返り時に、個々の到達度を生徒に伝え、指導する。	○各コースの実習日誌に学年ごとの共通目標・到達目標を反映させた。(5月) ○日々の振り返り時にそれぞれの指導を実施している。	B	○継続実施することで、共通目標の内容を指導者・生徒ともに浸透させる。
	「成果発表会」の充実実施 (学科部)	○実施3年目を迎え、生徒の理解や取り組み意欲は高まっている。	○1・2年生のコース選択の参考となるような発表内容や態度で実施できる。 ○落ち着いた環境で準備やリハーサルができ、当日の運営も生徒主体で実施できる。	○卒業前の集大成として意欲的に取り組む生徒の姿を引き出す。 ○余裕ある発表時間の確保及び運営役務の見直し。	○12月に実施計画した。このことで1・2年生のコース選択時の参考になるようになった。 ○前日の午後会場確保し、余裕ある発表となるようにした。	B	○各コースで発表内容を考え、まとめることにより、積極的な生徒の取組みがみられるようにする。
2 人とのよい関係性や社会性を育む指導の充実	ソーシャルスキルを高める指導の充実 (○学年部、研究部、支援部)	○上手に自分の思いを伝えることができずトラブルになるなど対人スキルに問題のある生徒が多い。また卒業生の中にも対人スキルの問題で職場で孤立しがちな生徒もいる。	○ソーシャルスキルを高める指導法等について理解し、このことを意識した授業に取り組む。	○教職員対象の研修会を実施する。 ○自立活動の個別の支援計画を授業者全員で共有する会を持つ。	○ソーシャルスキルを高める教員研修会を実施した。 ○自立活動の個別の支援計画を全員で共有する会を持ち、共通理解を図ることで生徒対応に生かされるようになってきている。	B	○自立活動の個別の指導計画共通理解の会を年間計画の中に位置付け、定着させていく。
	個に応じた取り出し指導の充実 (○支援部、学年部)	○各学年部に支援部員を配置し、連携して指導を行っている。	○担任や学年団、寄宿舎とスムーズに情報共有し、的確に個別指導ができていく。	○各学年部と支援部等が連携し、個への指導が必要な生徒に、抽出した指導を行う。	○個々の生徒の課題改善に向け、担任や学年、指導員中心に個別指導を行っている。 ○課題の共有や支援の方策の検討など、個別の支援会議を持っている。	B	○生徒の課題や取り出し指導の経過など、継続して情報共有していく。 ○情報共有する中で支援のニーズの見つけ出し、方策の見直しなどを行い、よりの確な個別指導につなげる。
	挨拶運動の実施 (○学年部、指導部)	○挨拶ができていない生徒がいたり、いざとなったらできるといふ安易に考えていたり、自分に自信がなく声が出なかったりと様々な生徒の実態がある。	○6割の生徒が元気で挨拶をすることができる。	○「さわやかタイム」(月曜日)を実施。担任外による巡回指導実施。 ○挨拶のレベルアップ ○挨拶を評価し合う機会を持つ。	○「さわやかタイム」が定着してきた。 ○生徒アンケートでは「元気で挨拶できる」と評価した生徒が41%であった。 ○挨拶に課題があると感じ、声をかけられないとできない、限られた人にしかできないと評価している生徒が多い。	C	○本校で求める挨拶像を職員全員で共通理解する。 ○教職員の挨拶をモデルに、挨拶するのが当たり前の雰囲気を作る。 ○生徒会や有志で挨拶運動を進めていく。
3 教職員の専門性や授業力の向上	臨床心理士による講義・演習の実施 (○研究部、学年部)	○昨年度の琴の浦検証プロジェクトより、生徒のソーシャルスキルに課題があることが明らかになっており、早急な対応が必要である。	○ソーシャルスキルについて職員が理論的、実践的に研修を行い、日々の授業や生徒指導の中に生かすことができる。	○臨床心理士による演習や研修会等を計画的に実施し、職員が研修できる場を提供する。(「心の道場開設事業」として実施)	○5月より3回臨床心理士を講師に招聘し、研修会を実施した。1回目は職員研修、2回目は事例検討会、3回目は授業研究とした。研修で学んだことを授業の中で取り組んでみている職員もいる。	B	○はじめに最終的な目標を提示し、全職員が目的意識を持って積極的に取り組めるようにしていきたい。
	授業研究会の実施 (○研究部、教務部、学科部)	○昨年度の琴の浦検証プロジェクトにより職業学科では働く心構えを培うために共通目標を持って取り組むこと、また、生徒にソーシャルスキルの力が培われていないことも確認した。	○生徒一人一人の実態やニーズを総合的に捉え、チームアプローチによる指導と支援をPDCAサイクルにて行い充実した職業教育を実践する。	○専門教科及び職業自立の授業を公開し、育てる力の共通理解を図る。 ○職員専門性の向上を図るため職業教育及び発達障がいについての研修会を行う。	○10月、11月と授業公開を行う。授業公開に際しては学科会が、参観の際は全職員が授業を調整して参加できるように工夫しており、全職員が積極的な姿勢で取り組んでいる。	B	○初めての試みなので、職員にアンケートを取り、それを参考にしながら日々の授業に活かすことができるように話し合いの持ち方、参観の視点など工夫したい。
	初任研修を有効に活用した自主研修の奨励 (○研究部)	○昨年度より、初任者研修の一般研修に希望の職員も参加できるようにし、個々の職員にとって必要な研修が効果的に受けられるようにしているところである。	○全職員が、自分に必要な研修を選択して受講することができる。	○初任者研修等、様々な研修会の情報をできるだけ早く職員に提供する。	○定期的に初任研の情報を掲示板に掲載し、必要な職員はそれぞれ一緒に研修を受けている。	A	○今後も継続して実施したい。
4 教職員の対応力の向上	対応力研修・コンプライアンス研修の実施 (総務部)	○昨年度、対応力研修の実施、日常的なコンプライアンスに関する情報提供などにより、法令等の共通理解や実践的な対応力についての理解が進んだ。継続した取組を行うことで対応力を向上させる必要がある。	○全職員が、学校現場における様々な事例を理解し、対応力研修等を活かして、的確な対応心がけることができる。	○年間3回の対応力研修で、実践的な演習を行う。 ○コンプライアンスに関するミニ研修を定期的に行い、情報提供を行う。	○対応力研修2回、コンプライアンスミニ研修1回を実施した。	B	○継続して研修を行う。状況に応じた研修内容を工夫する。
	様々な法令・規約等の共通理解 (総務部)		○教職員の服務や教育活動について、根拠となる法令や規約等を確認する習慣が身につく。	○職員朝礼や終礼などを利用し、法令・規約などについての共通理解を行う。	○通知等は都度タイムリーに、また、掲示板等を活用して正確な情報提供を行った。	B	○継続して取り組む。校内の規定等について確認しやすいようにデータベースを整理する。
5 PTA活動の活性化	保護者のニーズの把握 (総務部)	○PTA活動への参加率が徐々に減少してきている一方で、進路や卒業後に向けての情報や不安を感じているという保護者の声もある。	○保護者のニーズを把握した上でPTA活動を工夫し、保護者の満足度が向上している。	○ニーズ把握のための保護者アンケートを実施する。 ○アンケート結果や日々の保護者の声をできるだけ活かした活動を設定する。	○保護者アンケートを実施し、活動内容についての要望を集約した。要望に基づいてPTA研修の内容を検討した。	B	○研修以外で要望のあった活動について、来年度以降の活動内容に位置づけられるものを検討する。
	保護者研修会等の企画・開催 (総務部、進路部、支援部)	○就労の定着や卒業後の生活の充実のためには、今以上に保護者に対する情報発信が必要である。	○PTAミニ研修・PTA通信で様々な情報発信が行われ、研修参加者が増加している。 ○PTA行事とおして保護者交流が進んでいる。	○研修内容について学校からも積極的な提案をし、研修内容を工夫する。	○PTA主催の研修と学校主催の研修とを計画的に実施した。参加者は多くはないが、異学年の保護者交流が進むなど好評である。	C	○実施分の内容やアンケート結果の紹介や後期実施の研修計画を早めに提示するなどして、研修参加者が増加するように働きかける。

評価基準 A: 十分達成 (100%) B: 概ね達成 (80%程度) C: 変化の兆し (60%程度) D: まだ不十分 (40%程度) E: 目標・方策の見直し (30%以下)